

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520216

研究課題名（和文） ラテン文学における死の表象

研究課題名（英文） Images of Death in Latin Literature

研究代表者

高橋 宏幸（TAKAHASHI HIROYUKI）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30188049

研究成果の概要（和文）：人間が死すべき存在であるという認識が逆説的に古典の伝統を永続させる力として働いたという理解に立って、ラテン文学作品に現われる死の表象に古典古代全体の精神的基盤に関わる叙述表現を見出そうと試みた結果、ギリシアの場合と比較してローマでは、世代を越えた精神性継承のより強い働き、個人と国家の命運がパラレルをなした形での詩作の不死性、それらを通じて「ローマ人」像を描き出す伝統形成、といった特色が浮かび上がった。

研究成果の概要（英文）：From the viewpoint that self-awareness of man as a mortal being paradoxically served to keep inspiring and refreshing classical tradition, this study has attempted to see expressions revolving on the spirit of classical antiquity in the images of death depicted by Latin authors. As their characteristics, compared to the Greek counterparts, the stronger notion of spiritual legacy, immortality of poetic works identified with the fate of Rome, and formation of a tradition depicting the Romans in the mirror of life and death have been pointed out.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：西洋古典学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：西洋古典学、ラテン文学、死生観、表象、ウェルギリウス、オウィディウス

## 1. 研究開始当初の背景

ラテン文学はギリシア文学の伝統を受容し、その模倣と翻案から出発したことから、その独自性の問題がつねに作品理解において重要

な視点となる。その一方で、ギリシア・ローマの文化伝統とその時代が古典古代と総称されるのは、人間とは何か、よく生きるとはど

のようなことか、といった人生の根本に関わる問題意識から、ギリシアとローマという相違を越え、人間性の普遍的理解が深められたことによって。しかるに、古典古代における人間理解の基底にあったのは、まずなにより、神々が永遠の存在であるのに対し、人間は死すべき存在であるという認識である。

本研究はこの認識がラテン文学においてどのような表現を与えられたか考察しようとし、次の二つを重要な着眼点とした。

(1) 詩歌の女神ムーサと伝承の技術: 古典古代の伝統は、ムーサという女神を観念することにより、死すべき人間が永遠の真理をそのまま死すべき人間の言葉で伝えることは不可能であることを自覚しながら、永遠の真理にできるだけ近いものを人間の言葉であたかも真理であるかのように表現する方途を得た。

(2) 永遠の都: 一人の人間はどれほど偉大でも、死すべき存在として、寿命も才能も限られているゆえに、ローマの存続と繁栄は多種多才な人々が時代を越えて各々固有の貢献を果たすことによるという考えであり、これは、死すべき個人を越えて存続する人間の営みという点で、古典の伝統に重ね合わされて表現されている。

## 2. 研究の目的

(1) 人間が死すべき存在であるという認識が逆説的に古典の伝統を（ギリシアからローマへの継承も含めて）永続させる力として働いたという理解に立って、死の表象に古典古代全体の精神的基盤に関わる文学表現を見出すことを目指す。

(2) 関連作品の個別の文脈に即した解釈を提起したうえで、散文作品では個人と民族ないし国家、あるいは、個と類および種といった

面から歴史的視点、思想的背景に留意する一方、韻文作品では死を超越した永遠の相をムーサの働きにも見られるような詩作そのものに重ね合わせる自覚的態度に注意して、それぞれの死の表象に込められた意義をとりわけ古典の伝統との関わりにおいて明らかにすることを試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 基礎的作業として、(a) 関係研究文献の収集・整理、(b) CD-ROM およびインターネット上のデータベースサイトの検索によるテキスト分析と関係データの抽出・整理、および、(c) 原典テキストの注解（および未邦訳のものについては邦訳）を行う。

(2) これらを踏まえて、まず、(d) ラテン文学が範としたギリシア文学における死の表象について、それが現れる作品の文学ジャンルごとに整理・検討し、その特色、常套的要素を浮かび上がらせる。次いで、(e) (d) の結果を踏まえながら、ラテン文学における死の表象の諸側面をジャンルごと、作品ごとに文脈に即した解釈を提起しつつ、検討する。その上で、(f) ギリシア・ラテン文学を通して死の表象に関わる場面、モチーフ、詩句について異なる作品間での比較を行いつつ、その伝統の形成について考察する。また、(g) 関係作品の文脈をより深く理解するためにとくに必要と思われるようなゆかりの遺跡の見学、および、現地でのみ入手可能な文献資料の収集を実施する。

(3) 計画3年間にわたり、死の表象について、国家ないし伝統の存続との関わりから表現された死、個人の内面を投影して表現された死、神話世界に取材して表現された死という3つの重点テーマを設定し、おのおのについて重要と思われる作品群から特定のものを選んで考究する。

## 4. 研究成果

国家ないし伝統の存続との関わりから表

現された死というテーマをめぐって、

(1) ウェルギリウス『農耕詩』について、長い内乱による国土荒廃のあとに書かれたこの作品の根本において、人間が平和や幸福な生活を戦争での勝利によって獲得し、武力によって保持する矛盾が意識されていること、その矛盾がこの作品の属する教訓叙事詩というジャンルの制約にもとづくジレンマと重なり合いながら提示されていること、そして、そうした戦争をめぐる「生」と「死」の逆説が人間を「固い種族」とする神話的表現に凝縮されていることを観察した（〔雑誌論文〕④）。

(2) ウェルギリウス『アエネーイス』第4歌での主人公である英雄アエネーアースの資質ピエタースをめぐる逆説的提示について考究した。英雄は、自分との関係の深さに応じて相手を大切にす社会的美德ピエタースにすぐれるとされながら、自分の窮地を救った恩人であるカルターゴの女王ディードーを結果的に裏切ることになる。しかも、それは「ローマ建国」というより大きな使命を果たすためであったためであるのに、ディードーの命をかけた呪詛によって未来のローマに大きな困難を招来してしまう。その際、彼女の自殺は悲劇と見られると同時に、生が終わることで一つの「完結」を表現しているのに対し、英雄はピエタースにもとづく信じた行為によってさらに大きな苦難を背負って生き続けるという対比が観察された（公表準備中）。

(3) 『アエネーイス』が示すこのような苦難の始まりは作品の枠組みを越える、いわば、マクロの相を示している一方、それに呼応するように、作品後半では、前半での「放浪」の苦難が終わったあとに新たな苦難として描かれる「戦争」に明確な終わりが示されない。作品の結末での宿敵トゥルヌスの死につ

いて、それは一つの画期ではあっても、同時にまた新たな別の苦難の始まりを含意しているという解釈を提起した（〔雑誌論文〕③）。

(3) トゥルヌスの死をめぐる結末場面の問題を念頭に置きながら、『アエネーイス』に現われる「葬礼」のモチーフについて「永遠の記憶」「復讐」といったモチーフとも関連させつつ、作品全体の文脈に照らして検討した（公表準備中）。

国家ないし伝統の存続との関わりに加えて、個人の内面を投影して表現された死というテーマをめぐって、

(4) カエサル『ガリア戦記』の文体は、一般に、出来事の平明、客観的な記述に特徴を認められているが、実際にはその後のローマの歴史叙述に大きな影響を与えるような巧みな表現手法がとられていることを観察した。すなわち、死が間近に迫る戦場において、命を捨てる覚悟を潔しとしながらも、避けられるべき「蛮勇」と、称賛され、見做られるべき、忍耐と思慮を備えた「真の武勇」とが対比的に描き分けられていること、また、運命の逆転や戦局の急激な変化を強調する叙述構成、直接話法の効果的な使用による印象的表現などによって、「劇的」と呼びうるような叙述がなされていること指摘した（〔図書〕①第Ⅱ部第三、四章、〔学会発表〕②）。

神話世界に取材して表現された死というテーマをめぐって、

(5) オウィディウス『変身物語』第2巻に語られるパエトーンのエピソードについて再考した。父である太陽神の馬車を暴走させて世界を炎上の危機に陥れたためにユピテル神の雷電に撃ち落とされた若者パエトーンの死を詩人が作品の性格提示に用いていることを観察し、その死の場面にパエトーンの馭者座への変身を暗示しながら、明瞭には表現しない点に、いわば、変身そのものの変容

というような提示があることを見た（〔学会発表〕①）。

(6) オウィディウス『変身物語』第7巻で登場人物ケパロスが語る妻プロクリスの死について、語り手ケパロス自身を物語の主人公として描き出すような物語の結構と表現を指摘した。この成果は上記(5)とともに博士学位論文「オウィディウスの神話語り―手違いの詩歌―」（京都大学：2010年1月25日学位授与）に組み入れられた。

3つの重点テーマを総合した考察として、(7)ある人物が生前に示した精神性の継承を「靈魂」の働きとして捉え、ギリシアと比較したとき、その働きの強さ、個人と国家の命運がパラレルをなした形での詩作の不死性、「ローマ人」の伝統形成といった点にローマの特色があることを指摘した（〔雑誌論文〕②）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ①高橋宏幸、「文字、手紙、文学」、西洋古典額研究、査読有、58号、2010、102-110.
- ②高橋宏幸、「ラテン文学に見る靈魂と伝統」、アジア遊学、査読有、128号、2009、50-59.
- ③高橋宏幸、「ウェルギリウス『アエネーイス』後半における苦難の終わりと始まり」、専修大学言語・文化研究センター『Anglo-Saxon 語の継承と変容-中世英文学-』第1巻、専修大学出版局、査読有、2009、95-146.
- ④高橋宏幸、「「固い種族」の技術と労苦-ウェルギリウス『農耕詩』」、植月恵一郎他『農耕詩の諸変奏』、英宝社、査読有、2008、31-61.

〔学会発表〕（計5件）

- ①高橋宏幸、「パエトーンと太陽神の馬車の暴走-オウィディウス『変身物語』1.747-2.400」、比較神話学研究組織 GRMC シンポジウム「天と空の神話-月のしずく、星のかけら」、南山大学、2009年1月4日。
- ②高橋宏幸、「カエサル『ガリア戦記』に見る劇的叙述」、京都大学西洋古典研究会例会、京都大学、2008年12月23日。

〔図書〕（計2件）

- ①高橋宏幸、岩波書店、『カエサル『ガリア戦記』歴史を刻む剣とペン』、2009、209。
- ②高橋宏幸(編著)、ミネルヴァ書房、『はじめて学ぶラテン文学史』、2008、299。

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 宏幸 (TAKAHASHI HIROYUKI)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30188049

### (2) 研究分担者 ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者 ( )

研究者番号：

